

安心決定鈔の書誌

細川行信

安心決定鈔は、真宗の法語として、宗祖の御消息や蓮師の御文、および歎異抄と共に、大切な聖教として、とくに蓮如上人が絶対他力の安住所を示すものとして尊重されたことは、一般に知られるところである。にも拘らず、書誌学的に本鈔をみる場合、ことに不明な点が多い。もっとも、すでに上杉慧岳・瓜生津隆雄の両先生の労作や、近く奥村支祐氏の研究もあって、その裨益するところ大きく、就中、瓜生津教授の「安心決定鈔管見」には、本鈔の流伝に関して写本を九本あげ、その比較検討をなされている。これについて私も、さらに未紹介のものも加え、今迄に眼福をえた古写各本の書誌について報告したい。

まず、真宗聖教全書本の底本となった、本願寺派本願寺所蔵の蓮如上人書写本は、その筆跡と袖書より上人の筆写であることに間違いないが、奥書がないので何時書かれたかが不明である。これに対して真宗聖教現存目録に「伝蓮如」とある、大阪平野の慧光寺所蔵本は、本を欠く末巻のみであるが、すでに注意される如く、調巻が前後している箇所があり、一部に振仮名を略したところもみられ、やや筆勢の弱さが感じられる。恐らく、かかる点が伝蓮如筆と評されるものと推察するが、しかし、これを書写され

た当時は、奥書にある「文安第四之天初春下旬之比」と、すなわち上人の三十三歳で、また「右筆」とあり、存如上人に代って筆を執られたと認められる。さらに「江州長沢福田寺之琮俊」に授与されたという事も、琮俊が本鈔に相前後して、口伝鈔や御伝鈔を下付されている事実から考えて、その筆勢の弱さから上人でないといと決める事に同じがたい。

つぎに、先年、高田学報に紹介された文安六年の「木越光徳寺性乘」への授写本も、そののち所有者にお会いして照合することを得たが、これまた、本願寺派本願寺所蔵の文安六年五月二十八日書写の三帖和讃や、同じく宝徳元年二月八日の教行信証の下付本と共に、蓮如上人の書写本と認めねばならない。

以上の蓮如書写の三本を文字の上で比較してみると、三本共に全く同じとはいえず、仮名遣いの上で、本願寺本と旧木越本とは同じでも、この両本と慧光寺との間に可成りの相異がある。若干の例をあげると、「オ」を慧光寺本では「ヲ」、「ヘ」を「エ」と屢々もちい（詳しい事例は省略）、また、「掃」・「無」・「號」などの字についても、「飯」・「无」・「号」と略字を使用する比率が、本願寺本よりも旧木越本、さらに慧光寺本に高く、それはまた、慧光寺本の振仮名が一部省略されている事と共に、同じ蓮如上人の書写でも時期と場合によって、幾分の相異のある事を考えさせる。

つぎに、蓮如上人の御父・存如上人の書写本が願得寺に伝わるが、この本は、その奥書によって応永卅一年十月十五日に書写され、翌応永卅二年八月に淨興寺性順に授与されたものである。な

お、性順には、本鈔のほかに鸞上人絵詞（一冊）、教化集（二冊）、持名鈔（二冊）、浄土真要鈔（本一冊）、諸神本懐集（本一冊）が下付されて、今も浄興寺に襲蔵されている。このうち、教化集は存如上人の筆写であって、これと同じく安心決定鈔もまた、本願寺所伝本によって書写されたものと認められよう。ところで、聖教現存目録によれば、室町時代初期の一本として、大阪府雁多尾畑の光徳寺所蔵の本鈔が載せられてある。しかも、この本巻表紙に「本願寺七代目 存如上人御筆」とかかれ、末巻奥に「右二冊存如上人御筆 寛文癸丑仲夏十二日……（中略）……松谷院乗俊（花押）」とある。もし、この乗俊（光徳寺第十三代・延宝四年寂）の極書の通りとすれば、願得寺本と同じく存如書写という事になるが、しかし両本を比較すれば、その相異が甚しく、筆勢上よりも存如筆とは全く認められない。

これに対して、願得寺には更に、蓮如上人の息・実悟師の書写本があって、この実悟本を存如本と照合すれば、文字の使用にいたるまで、ほとんど同致であり、存如本の末巻奥に実悟の識語があつて、その両本の関係をも知られる。とくに、実悟本の本・末両巻の夫々に記された奥書によれば、その底本は「曆応元歳戊寅十二月十五日の書写であり、さらに 乗專書写本を以て校合したことを誌してある。このことは注意すべき事であつて、すでに乗專のいた覚如上人時代、その流伝の異本があつた事を示すものである。こうした事を間接的に推察させるものとして、室町中期と認めうる、大谷大学所蔵の端坊本、竜谷大学所蔵の写字台本の存在を見逃すわけにはいかない。ただ、この二本とも奥書がない

ので、これ以上の言及は差控えて、さらに室町末期のものであるが、近年とくに注目される竜谷大学所蔵の、いわゆる空観本について考えたい。空観本とは、その奥書に「貞和三歳丁亥初冬上旬第六日奉書写授与之而已 願主釈空観」とあつて、願主として空観の名が出ているからであり、この本の特色としては外題がなく、首題に「安心決定鈔」とあつて、尾題もないことから、本末両巻に分けられる前の形のものとして注意されている。しかし、奥書が両巻それぞれにあることからして、本末に分けられていないとしても、一巻でない事もまた留意されねばならない。なお、この空観本と同じ奥書を有するものとして、東京都浅草の源光寺に末巻のみの一本が存し、さらに某氏所有の一本にも眼福をえた。とくに、後者は筆跡の上よりも貞和三歳の書写と認められる。ただ、本のみ的一本で、しかも最初の一紙を欠くので首題の有無を知りえないが、竜谷大学所蔵本と対照した結果、貞和の空観本は異本との校異を施し、その異本と竜大所蔵本とが同系とみられる。このほか、和歌山の真光寺本には「康永元 壬午年 夏中拝写訖」と奥書され、その底本が康永元年書写本であることを示しているから、すでに鎌倉末期に数種の本鈔が存在していたことは明らかである。今こうした本鈔流伝の系統を、年時順に示すと次の如くである。

- ① 曆応元（一三三八）年 乗專
- ② 康永元（一三四二）年 乗專
- ③ 貞和三（一三四七）年 空観

なお、このほかに兵庫県の高根寺に「貞和二歳丙戌六月下旬」

の書写になる一本があり、乗専本として伝えられていたが、現在その所在を知りえない。もし此の一本を加えると、これを③とし、空観本を④としなければならぬ。しかし、それはともかくとして、相当に早い時代、いくつかの書写本が知られるにも拘らず、その著者について余り論証されていないことは、何か私には気にかかることであり、乗専と空観、そして乗専の師・覚如、仏光寺系の空観に対する存覚との交渉、さらには覚如・存覚両上人の師である樋口安養寺の阿日房彰空、そして彰空をとりまく西山系の人々、今こうした点を追求してゆくと、思想内容の面からの探究とともに、かなり問題をしぼることができる。ただ現在のところ明確に著者を指すことができないが、一応、今は本鈔古写本について、その紹介をするにとどめ、この後の研究の糸口を示して中間発表とさせていただいた。

近世思想の仏教受容

柏原 祐泉

日本近世の仏教思想は三系譜をとって発展したと考える。(一)は寺院集団内部での宗字の系譜であり、(二)は寺院集団外部での庶民の仏教受容の系譜であり、(三)は同じく寺院集団外部での諸思想の仏教受容の系譜である。この内、(一)はアクティブな性格をもち、その近世的発展の様相については、研究もかなり進められている。

これに対し、(二)(三)はパッシブな性格をもつが、歴史面での仏教の最も実動的な様相を示すものであり、近世仏教の本質をしるうえで最も重要な意味をもつが、この面の研究は未だ殆んどおこなわれていない。私は、(二)についてはさらに、習俗的受容を示す系譜と、内面的受容を示す系譜との二面に分れるものと考えているが、ここではとくに、(三)の系譜について一般的なその実態を考察してみようとおもうのである。なお、近世の仏教思想は、右の三系譜が殆んど互に交流することなく、別個の発展形態をとるのであり、ここに仏教思想の近世的特質があり、またそのまま明治以後の近代ないし現代の仏教の本質に直結する点で、多くの問題を提供するのである。

ここでいう近世思想とは、いうまでもなく儒学・国学・心学・文芸など、近世的性格をもって勃興し発展した諸思想をいう。このうち、儒学・国学は一般的に仏教排斥を説くが、これに対し心学では一般に仏教を受容し、文芸でも仏教受容に積極的であるとされているものがある。しかし、儒学者・国学者でも仏教受容を示すものもあり、仏教の信仰者、理解者とされている人もある。儒学者の中江藤樹・徳川光圀・森尚謙・兩森芳洲や国学者富士谷御杖などは、その顕著なものである。また国学者本居宣長などは排仏論を説くが、その基本思想の構造が仏教的思维によっていることは衆知のとおりである。また、心学者のなかでも、とくに石田梅岩・手島堵庵・中沢道二・布施松翁・柴田鳩翁などは仏教思想を深く受容れていることでも知られている。其他、農政家二宮尊徳や同じく大原幽学などの勸農思想にも仏教の影響が強い。また